

大阪狭山に生きる人

書家

八島 芝瑠

Shiyou YASHIMA

大阪狭山市の岩村東公民館の前の道路を、西山台から大野台に向かっ
て進んでゆくと、陶器山通りとの交差点に入る少し手前左側に、玄
関奥の家屋の白壁に「リースペース 芝瑠」と大書された木のボードの掛
かった邸宅があります。今回ご紹介するのがこの家の主人書家、八島
芝瑠さんです。

「字は体を表す」という言葉が
ありますが、この芝瑠さんの作品
を見ていますと、しっかりと字
形、関連な文字の流れの中に全体
として漂う暖かさに書き手の姿を
感じます。

芝瑠さんは、大阪市内で生まれ
(本名善子)戦争中、小豆島に疎
開、終戦後昭和二十三年大阪に
帰りました。幼時から商家の大福
帳を書くお母さんの筆使いを真
似て字を書くことが好きだった
芝瑠さんは、早速近くの書道教室
に入会し習字を始めました。そし
て高校に上がった時、書道の授業
で教わった先生の「仮名」文字に

魅せられたことが書始める原
点になったといえます。それ以来、
入門していた松田松畔先生のも
とで学びに全力を注ぎ、他の習い
ごとや遊びに全く興味も無く、
書道大好きの一途だったよう
です。28歳の時独立、いよいよ書家と
しての第一歩を踏み出しました。

「怖くなかったですか、不安感と
か:」すると芝瑠さん、「思いま
せんでしたね。私は両親から暗
示をかけられて育ったんです。書
けば書くほど上手になる。人の
倍書けばその人より少しは上手
になる」と。これを受けてゆけば
大丈夫なやと確信していまし
た。それでも挫折感を味わうこ
とは何度もありましたが、逃げ
たらお終いと書き続けました。
今でも下手だなと思うことがあ
ります。しかし書き続けたいと思
う情熱がそれを上まわっているの
で書いているのでしょね。」

そこで芝瑠さんに聞きました

芝瑠さんが大阪狭山市に居る

プロフィール

八島芝瑠(やしましろう) 本名、善子(よしこ)
書家、書道研究一瑠会主宰
日本書芸院参与・審査員
読売書法会理事・審査員
全関西展招待・審査員
平成12年、大阪狭山市書道協会設立・会長
平成18年度大阪狭山市教育文化功労者表彰を受ける

八島芝瑠さんは書家として、
また書道の先生として、大阪狭
山市で40数年間にわたり活動を
続けています。「書」とは「文字を
審美的対象として書く」一つの特
殊な芸術を云う(平凡社世界
百科事典)そうですが、まず八
島芝瑠さん(以後芝瑠さんと呼
ぶ)の「書」を見てみましょう。



日展 初入選作品▶

移しアトリエと書道教室を設けた
のは昭和47年。母屋の2階の教室
では毎土曜日、子ども達が書道
の学習を受けています。この時
間が今、芝瑠さんにとって最も楽
しい時間のようです。子ども達へ
の指導のポイントを聞くと、「ま
ず筆の握り、持ち方やね。次に書
く姿勢、きちっと座り背筋を延
ばして書く。そして、書けば書く
ほど上手になる」の3点。それと
書いている字や言葉について好奇
心を持たせる、想像力を養うこ
とかな。芝瑠さんの書に「未来は
こどものふるさと」というのがあ
ります。これが子ども達に拓いた
芝瑠さんの夢とみえました。最後に
芝瑠さんにとって書道とは、と聞

いてみました。
「書道は私にとっては人生その
ものです。書を書き続けることは
常に前に向かって進む、自己革新
を続けることなのです。私は「昨
非」という言葉を座右に、書き続
けることで得る喜びを生き甲斐
としたのです。何か偉そうなこ
とを云うたかな?」と、ちょっとは
にかむように肩をすくめた八島
芝瑠さん、昭和12年生まれ79歳。
①

主な活動歴

- 日展入選8回
- 読売新聞社賞2回
- 日本書芸院史臣賞2回
- 一瑠会書道展(成人の部34回)
- (学生の部31回)を開催
- 狭山池平成大改修記念碑文認書
- 狭山池築造1400年記念
- 「狭山八景詩文長軸八景の書作」等

